

## ユフロ国際研究集会準備・運営の記録

— 事務局日誌から —

木 平 勇 吉 (ユフロ国際研究集会事務局長)

この研究集会の公式報告はすでにユフローJ ニュースNo.23に掲載され、その成果については大会議長南雲秀次郎氏が本誌で集約した。一方発表されたすべての研究論文はプロシーディングスとして発刊され多くの方は既に一読されたと思う。さらに海外の主要論文は翻訳されて森林計画研究会報に掲載される予定である。したがって、ここでは準備を担当した事務局の日誌にそって印象に残った事項を個人的な感想をまじえて述べる。

昭和57年12月某日 東大森林経理学研究室で、国際会議を日本で開くことについて木平が南雲氏と相談する。内藤氏(宇都宮大)も同席。この仕事の第一歩となる。

昭和58年1月某日 東大にて下準備を相談する。先の3名に小林(新潟大)、西川、天野(林試)、箕輪(三重大)、末田(名大)、田中(東大)の各氏が加わる。林業統計研究会の常連である。開催場所として筑波、東京が挙げたが結局東大、期日は昭和59年10月15日～19日とする案が決まる。この日の相談で最重要事項が即決し、それは結果的に実行できて的確な判断であった。

3月15日 林業統計研究会と森林経理研究会に主催機関を引き受けてもらうために会員に国際会議の企画案を送付する。目的として(1)研究成果と経営実践の結びつき、(2)アジア太平洋地域の森林問題(3)研究成果と研究者の国際交流、を列挙する。

4月15日 日本林学会大会(岩手大)にて林業統計研究会は共催機関になることを承認。森林経理研究会も後日会員の承諾を条件に了解。はたして実現可能かを判断しにくい話であり、当然ながら白けた承認となる。両研究会の会員を主体に運営組織の発足準備を進める。

4月22日 IUFRO S 4. 04のリーダーはMaginの死去(昭和57年秋)以来空席のため、代ってサブ・リーダー Navon からS 4. 04分科会集会の日本開催の承認を受ける。第4部会長Plochmannへ通知する。Maginの死は準備を進める上でも個人的にも大きな痛手であった。その後、新しいリーダー Griess とは手紙による交際から始める。立派なリーダーでありヨーロッパ・ユフロの色彩が濃い。

5月16日 組織作り完了。大会議長南雲氏、実行委員会には各大学森林経理学教授、林野庁野村計画課長、統数研の石田部長、実務を担当する事務局は先の8名木平、内藤、西川、天野、小林、箕輪、末田、田中の各氏となる。共催機関はIUFRO S 4. 04、林業統計研究会、森林経理研究会、後援機関は日本林学会、林野庁、東京大学それに日本林業技術協会が加わる。もっと簡単な組織も考えられるが今回はこれで良かったといえる。

6月1日 会議の名称を「森林経営に関するユフロ国際研究集会」とし第1回案内状を国内外の機関、個人に発送する。IUFRO News, ユフローJ ニュースにて公表。目的は(1)研究成果の交流、(2)理論

と実践の結びつきとする。先のアジア太平洋の地域森林の問題をはずし、通常のユフロ年次研究会と性格づける。これは林知己夫氏（統計数理研究所）のアドバイスによるもので結果として集会の運営は楽になった。

**6月17日** 第1回事務局会議を東大で開く。開催場所、日程を正式決定、エクスカージョンは鹿沼林業と日光・中禅寺湖とする。大会プログラム、予算案、宿泊ホテルの詳細も決定、この時点での予備登録者（第1回案内状の応答者）は海外109名、国内69名である。実質の集会規模を海外参加者20名、国内50名として予算はユフロ-J補助金と会費による自己資金の範囲とした集会のイメージを描いた。海外への呼びかけはユフロ機関会員、過去のS 4.04の集会参加者、個人的な知人、さらに北村教授（山形大）によるヨーロッパ集会での資料配布、IUFRO役員、アメリカ林野庁への組織的配布など相当に頑張った。海外の応答から日本への関心の高さと同時に旅費調達の困難さが読みとれる。

**7月26日** 第2回事務局会議を林統研夏期ゼミ（新潟大佐渡演習林）を機会に開く。研究課題の範囲について林統研会員から広く、参加しやすくとの声が多く、反面研究会の性格からは限定しなければならない。研究課題についてはS 4.04リーダー Griess と最後まで対立した。（国際）会議での報告課題はその開催目的に合致することは当然であろう。佐渡ゼミには家族同伴が多く、その好影響によりこの国際集会での多くの婦人同伴に結びついたと感じられる。

**10月13日** エクスカージョン下見、内藤氏、木平は宇都宮大学演習林宿舎をまわり福田孫光氏と面会の上依頼する。バスコースと所要時間や説明資料を検討、藤原教授（宇都宮大）を含めて内藤家の歓迎夕食をいただく。海外参加予定者の招聘など手紙の往復多くなる。ユフロ-J、文部省、学術振興会、科学技術庁、外務省、海外協力事業団、林野庁、日林協、林試、林業経営者協会との接触はじまる。一般には国際会議＝京都コンgresやオリンピックの印象が強いが、我々は日常的、非話題的な集会のイメージを描く。

**11月4日** 第3回事務局会議を東大で開く。参加要項決定。参加費、エクスカージョン費各々15,000円、報告原稿上限10枚、発表時間20分、申し込み締め切り日を昭和59年3月1日とする。海外私費参加者、セッション議長への財政援助を検討、参加者規模100名、発表件数40件と予想修正。

**12月1日** 第2回案内状、執筆要領を予備登録者やユフロ機関に送付、参加者の正式受け付けを始める。国内から林野庁計画課、治山課、北海道庁、栃木県、岐阜県の行政官、石原、速水、諸戸、大橋の林業経営の各氏、住友林業、日林協の技師の参加が決まる。嶺東大名誉教授のすすめによる所が大きい。海外からは箕輪氏招聘の Whyte 教授（学術振興会）、天野氏招聘 Rose 教授（科学技術庁）の参加決定、その他京大招聘の Prachaiyo 博士、京産大の Papanek 教授、北大、信大の Yu 教授など国内機関による招聘も実現する。セッション議長としての Klemperer, Helles, Cortner, Harou, Ellefson などの参加が決定。S 4.04 リーダー Griess 夫妻の参加も予定される。ユフロ-Jの資金援助が決定。過去一年間の関係者の努力が実りつつある。

**昭和59年3月16日** 第4回事務局会議。参加者、発表者増加により発表プログラムの再検討を行う。

発表は2会場設定，エクスカージョンはバス2台に変更，宿舎は中禅寺金谷ホテルとする。この間，宇都宮大演習林関係者や内藤氏には特に世話になった。

実行予算案と東大会場設営案を作成する。発表プログラム担当の箕輪，小林の両氏の仕事が忙しくなる。

4月3日 日本林学会（東大）で実行委員会と第5回事務局会議開く。実行委員の大半が出席，準備状況を報告。発表申し込み者全員の発表は困難となり誌上参加形式が了解される。外人宿舎をサテライトホテル後楽園に決定。エクスカージョン，懇親会など社交行事の手配を進める。

4月25日 発表者の決定，発表プログラム暫定案作成，ポスターを内外ユフロ機関へ配布，ユフロロ邸を東京銀行，郵便局に開設，参加費等の振り込み開始。ポスターは末田氏（名大）の企画作成による。

7月1日 最終案内状を送付。エクスカージョンの申し込みを受け付ける。原稿の提出が始まり参加者の実態が浮かび上がる。IUFRO 本部へ報告。宿舎予約，バス予約，ガイド資料などの確認。

9月14日 第6回事務局会議。参加予定者は海外54名と同伴者10名，国内94名に達する。Griess 夫妻の参加も確定，箕輪，小林氏は発表プログラム調整に苦心する。各セッション議長確定する。会場設営，社交プログラム，エクスカージョンの実施分担を決め，準備とどこおりなく進む。レディース・プログラム担当者をさがす。

9月25日 国内参加者へ最終案内を送る。報道マスコミへの広報行方。朝日新聞および在京各社へは林野庁広報担当官森田氏の協力を得る。後援団体代表に招待状。資金手当てをする。海外からの参加者の来日始まり，名古屋大，三重大，林試，京大，京産大等への個人的訪問が行われる。レディース・プログラムの担当者を末田氏が紹介，ホテル予約確認する。サテライトホテル営業氏は極めて親切で適切。

10月13日 第7回事務局会議。実施準備を始める。会場設備，資料の箱づめ，補助員打ち合せを行う。上智大女性アシスタント来る。発表プログラムの最終案作成に箕輪，小林両氏忙しい。サテライトホテルでの参加者チェックイン始まる。深夜になるも予定より少なく心配する。事務局担当以来はじめて不安を感じる。

10月14日 海外参加者続々と到着。手紙での知人が目の前に現れて大変に嬉しい。旧知の友人の場合はなおさらである。受付担当の西川，天野氏には大変な苦勞と迷惑とをかけた。予定外参加者が少しあわてる。夕方よりホテルで“Ice Breaker”が始まる。日本では初めての催しであろうか。これは実に有効であり用意も楽である。しかし実際にはディナーパーティーに近い空気であった。夜，海外参加者をチェックすると予定者のほぼ全員が確認出来た。大いに安心する。

10月15～17日 研究発表始まる。まず言葉の問題について。聞くことに関して一般的に良くはわからないのが私の場合であった。日本人の発表者については比較的苦勞が少なかったと推察する。周囲がすべて外国人の場合に比較すればであるが。すべての発表者の報告をぜひ聞きたかった。2会場制はこの点では不便である。会場の空気は大きい室より小さい室が断然よい。発表された論文の質につい

ては好感の持てるものが多い反面、平凡なものも負けずに多かった。国内学会に較べてさほど違和感がない気もした。しかし、いくつかの日本人発表には非常に感銘をうけた。日本の私有林経営の実践事例報告は貴重であったが研究者側との交流は十分にはいかなかった気がする。社交行事としての都内観光、ディナーパーティー、レディースプログラムは十分に目的をはたした。

**10月18～19日** エクスカーション。担当の内藤氏の苦労は大変と推察するが参加者は全員が非常に楽しかったのではないかと推察する。福田孫光氏の経営実績と今回への準備には頭がさがる。エクスカーションの勝負は企画にあったと思う。また栃木県の応援も有難い。次に機会があれば再び栃木県と組みたい気持である。

**10月20日** ホテルでのチェック・アウト始まる。このホテルの待遇は一般に好評。その上多くの海外参加者の宿泊代の一部を主催者が負担する。こんな好待遇の海外集会へ我々も参加したいとの声があった。内外の参加者が互に別れを惜しみながら、それぞれ集会後の個人プログラムに移る。私は中国 Yu 教授、オーストリア Griess 夫妻、スイスの Schlaepfer 氏、ニュージーランドの Whyte 教授を秋の信州のカラマツ林、木曽のヒノキ美林へ案内した。集會中の仕事から解放されゆっくりと話す機会を得た。信州大学では Yu 教授、Whyte 教授に講演をお願いした。特に Whyte 教授は英語で行い私のささやかな夢が実現できて嬉しかった。これからは海外訪問者には必ず大学で講義を依頼するつもりである。

**11月10日** 参加者、実行委員等へ実施報告書を送付。協力者への礼状。林野庁、日林協、経営者協会へは南雲氏とあいさつ回り。南雲氏より夕食をごちそうになる。二人ともそれぞれ時間と経費とを使ったがそれ以上に得たことを話し合った。

**12月15日** 第8回目で最終の事務局会議を開く。小林氏がプロシーデングスの編集を完了。印刷、販売、配布に移る。田中氏より会計決算がある。発表された論文の翻訳を林野庁のはからいで森林計画研究会報へ掲載することを決定。末田氏が担当する。

**昭和60年1月20日** プロシーデングス完成。国内外へ発送する。実行委員会や事務局の運営組織は解散する。最後に、林業統計研究会の皆様には大変にお世話になりました。ありがとうございました。